森林教室等を通じた地域とのつながり

神岡営林署　栃尾森林事務所　森林官　　安　藤　達　也

約２兆４千億円の赤字を抱える国有林には経営改善・合理化を進めることとあわせて、世論に対しその役割についてのＰＲが必要と思われる。ここ数年「ＰＲ，ＰＲ」という声を聞くようになったのもその現れであると考えられる。又、小学校の教科書にも環境問題・森林・自然について掲載され、自然・環境保護についての意識が高まるなか、広報活動はより重要なものとなっている。

活動は林野庁から森林事務所までそれぞれの立場に於いて行なわれているが、当署では「森林・林業の重要性とそれらを守り継承していく営林署の役割について、大人から子供迄幅広く地域の人に理解してもらう。」ことを目的に署・森林事務所・事業所が連携をとり、その達成に向けて努力をしている。

取り組み方としては、事前に要請を受ければいつでも森林教室等を行う用意のあることを、機会あるごとに各種団体へＰＲ、根回しをするなど、地域の人達が要請し易い土壌をつくってきた。

以下、今年度実施してきた事を具体的に紹介する。

１．植樹祭の中での森林教室

神岡町西小学校の生徒を対象に、ヒノキ苗の植樹、森林の働きについて、茸についての説明、椎茸菌の打ち込み実習、又、木材生産団地において立木の伐倒、木材の搬出の方法を見学した。生徒からの質問も多く、好奇心を駆り立てることができた。

２．小学生高学年の授業

神岡町山田小学校の要請により、授業の中で森林教室を行う。

ビデオ等を活用した森林の働き、及び、年輪板を使って木の成長についての講義をし、その年輪板でネームプレートの作成を実施。

自然のメカニズムをＶＴＲ等ビジュアルに訴えることで生徒の反応がより大きなものとして感じられた。

3．竹の子ツアーでＰＲ

分収造林契約団体である神岡町商工会議所内の「緑を守る会」の要請により、下刈を終了した契約地付近にて根曲がり竹等を採取し、山菜料理を楽しみながら自然と親しみ、親子の交流を図った。又、契約地の今後の施業について、時期・方法の説明を行う等して好評を得ることができた。

4．学校の回りにシラカンバの記念植樹

神岡町東小学校校舎完成２０周年を記念し校舎前の土手にシラカンバ４０本を植樹、シラカンバの特徴・植え方及び、森林の働き、身近な樹木について、特に飛騨の生活に根付いたホオノキの葉について、効能・利用方法を講義した。

今後シラカンバ並木の育成に向けてアフターケアを含め、つながりを持ち続けていかなければならないと考えられる。

5．神岡町中山地区の住民水源地探訪

神岡町林研クラブ会長は中山地区在住であるが、地区住民の中に地元の山を知らない人が増えてきたため、水源地探訪を提案、企画。現地付近が国有林であったため、当署へ案内役の依頼があり、職員が同行。

幼児からお爺さん迄が参加する中でソンボ国有林の概要と今後の施業、森林の働きについて自然観察を行いながら説明をした。

地元の山で山野草・動物等を観察し自然を十分楽しむことができ好評であったと同時に、営林署の役割についても理解を深めてもらえたと確信をもった。

6．林業構造改善事業啓蒙活動に一役

神岡町教育委員長より要請があり、小学生と大人を対象に木の成長について、浅井田貯木場に出される木材の用途・価格について講義。エンジュを使ったネームプレートの作成や森林に関するクイズ等をおこなった。

予定人数の半数の参加であったが、児童はネームプレートの作成に目を輝かせ、大人は木材の価格に興味を示した事が対照的であった。

7．親子で登山

上宝村栃尾小学校の恒例行事として行われる親子登山に同行し、森林教室を実施。

今年度は焼岳登山であったため、活火山のメカニズム、森林の中のサイクル、森林の働き

について、又、登山道沿いに設置されている樹名板を活用し説明を行った。

樹皮の香り等、児童が今まで経験したことのないもので五感を刺激することにより強烈な印象を与えることがわかった。

以上の活動の結果

(1) 児童はビジュアルや五感を刺激する事に驚きや興味を示した。

(2) 父兄は森林イベントを通じて子供との触れ合いと実益や価格に興味をもたれる方が多いと感じた。

そんな中で「営林署の役割に対する理解を深めた。」との意見も多く有り、より期待を担うこととなった。

今後の課題は、

(1) 対象や規模・場所・時期・時間等をよく考慮した内容でなければならないこと。とおり一辺で型にはめてしまったもので、対象の心を摑むことはできない。

(2) 教室を行うスタッフも専門化としての能力が要求されること。森林官1年目や現場経験の少ない者には、余裕もなくマニュアルどおりに行うことも儘ならないなど、人材育成が重要となる。

(3) 父兄や地域の中には営林署にたいして厳しい意見を持っている方もあり、より充実した広報活動を行う等地域に溶け込み活動をしていかなければならない。

ここで植樹祭に参加した児童の礼状から一編を紹介する。

営林署のみなさまへ

このまえは、どうもありがとうございました。

いろいろ勉強になりました。

一番、勉強になったことは、木を植えることがたいへんだと思いました。

一番になにをするということもぼくは、もうわすれるくらいだけど、よくおぼえているからすごいと思いました。

キゅうな山だけど植えるのにたいへんな仕事だと思います。

ぼくは二年生や三年生のときは緑なんてどんなにでもかってになってくると思ったけど四年生や五年生からは、人の手でつくられて人の手でなえを植えて、そだてることでたいへんな仕事だと思います。

それで大人になってもたいへんな仕事だと思います。

ずにー人でも緑はつくれるので大人になってもー人でも緑をたいせつにしたいです。

それとー人つくれば、みんなまねをしてくれるのでおじさんとかにおしえてくれたみたいにみんなにおしえて緑をたいせつにする人をふやしたいです。

嶋田祐二より

他にも「今まで自然は放っておくものだと思っていたけど、おじさん達の話を聞いてそうでないことがわかったし、おじさん達が守ってくれるので安心しています。」との声もある。我々が子供達の未来への責任を担っていることをあらためて認識させられるとともに地域との相互理解をより深めるための接点として積極的に活動していかなければならないと考える。

こうした努力に対し、ハード面ではビデオ・教材の充実等、ソフト面においては森林教室研修のように人材育成を行う等のサポートをより一層充実していくことが必要である。